

# 流音のタイプとその地理的分布

—日本語ラ行子音の人類言語史的背景—

松本克己

キーワード：単式流音型，複式流音型，流音欠如型，  
環太平洋言語圏，アフロ・ユーラシア言語圏

## 1 はじめに

「流音」とはもともとギリシア文法学の用語で、ギリシア語の *hygros*、これがラテン語に訳されて *liquidus* となった。音声用語としてはじめて使われたのはディオニュシオス・トラクスの文法書（前100年）で、ギリシア語の /m n l r/ の4つの音を表していた。現在ならばさしずめ「共鳴音」(sonorant/resonant) として分類される音種である。近年になって、この中の m, n は「鼻音」として別に扱われ、l, r（およびそれに類する音）だけを指すようになった。ここでいう流音も、もちろんこの意味である。

ギリシア文法家の言語音の捉え方は、もっぱら聴覚印象に基づくものであったが、それに対して的確な調音観察に基づいて築かれたインドの悉曇学の伝統では、l, r は y, w と共に「半母音」と名付けられ、悉曇文字表の中では閉鎖音系列の後に位置づけられている。これを表すサンスクリット語は *antaḥsthā* で「(子音と母音の) 中間に立つ音」という意味である。サンスクリット語でこの4つの音は、その現れる環境によって、ある場合は子音 (non-syllabic) ある場合は母音 (syllabic) として働いたからである。

インドの悉曇学の影響を受けた中国の音韻学では、流音に相当する音はいわゆる「来母」で、これは「半舌音」という特別の名称を与えられて、

やはり漢字の字母表の最後に位置づけられている。他の声母(=子音)とは性格を異にする音と見られたからであろう。

一方、この頭子音をもつ漢字は、日本語ではすべてラ行子音で始まる漢字として受け入れられた。中国語の来母に対する日本語のラ行子音による対応は非常に明確で、日本における漢字受容の長い歴史の中で、この音の対応だけは全く動揺しなかった。これは両言語の音体系の中でこの音がきわめて安定した地位を保ち続けたことを物語るものであり、またその状況は今も変わっていない。ちなみに、日本語の50音図の中でラ行音がヤ行とリ行の間に位置づけられているのは、いうまでもなく悉曇学の伝統に負っている。

このような言語学史的背景からも窺えるように、流音と呼ばれる音種は、諸言語の音体系の中でやや特別の位置を占め、また通時的に見ると、他の子音や母音に比べて比較的变化の少ない安定した音である。実際、ギリシア語やサンスクリット語を含めた印欧語族の全体を見渡しても、流音の l と r は鼻音の m, n と共に言語間の対応が最も安定し、数千年にわたる印欧語の歴史の中でその基本的性格をほとんど変えなかった。

ところで印欧語系の言語は、過去の記録に残る言語であれ現在話されている言語であれ、すべてが例外なく、この流音に l (に類する音) と r (に類する音) の少なくとも2種類の音を区別している。従って現代の音声学でも、流音には「側面音」(lateral) と「r音」(rhotics) という2種類の音を基本的に異なった音種として立てるのが習わしである。

なお側面音は、舌先を歯茎に付けて舌の側面から呼吸を流すという基本的な調音ジェスチャーに関してそれほど言語間の変異はないが、いわゆる「r音」は、舌先のふるえ音から口蓋垂の摩擦ないし接近音まで言語間での調音的変種がきわめて多く、そのために側面音に対応するような調音上の一般的名称がない。従って、ここでも単に「r音」と呼ぶことにする。いずれにせよ、流音に側面音と r音という基本的に2種類の音を区別することは、ヨーロッパの言語とその土壌の中で育った現代の音声学ではもはや当然の常識とされ、また世界言語の音韻記述のためにも、この区別は不

可欠の道具立てと見なされてきた。

しかし上に見たように、中国語や日本語にはこの常識が当てはまらない。ギリシア、ローマの文法家以来、どんな言語にも当然存在すると見られてきた l 音と r 音の区別がここには見られず、要するに流音が 1 種類しかないのである。特に、日本語のラ行子音のこの特徴は、ロドリゲス以来西洋の学者の注目するところとなり、また明治以降、西洋語には必ず存在するこの l と r の区別を習得するために、多くの日本人学習者が少なからぬ努力を払ってきたことも周知の通りである<sup>1</sup>。

拙論で「流音のタイプ」と呼んだのは、流音という音種におけるこのような側面音と r 音という区別にもっぱら着目したもので、従来の音声学書に見られるような、l 音と r 音の様々な変種やその音声・音韻的な分類に直接関わるものではない<sup>2</sup>。つまり小論の主たる狙いは、中国語や日本語に見られるような流音のタイプがはたして人類言語全体の中でどのような現れ方をし、またそれがとりわけ日本語の世界言語における類型論的ないし系統論的な位置づけに関してどのような意味をもちうるかという点を探ろうとする。「日本語ラ行子音の人類言語史的背景」というやや大げさな副題の意図するところもそこにある。

## 2 世界言語における流音タイプの分布

上述のように、ここでは世界言語の流音のタイプを大きく分けて、流音という音種に側面音と r 音の少なくとも 2 種類を音韻的に区別するタイプとそのような区別をもたないタイプの 2 つを立てる。前者をかりに「複式流音型」、後者を「単式流音型」と呼ぶことにしよう。

なお単式流音型に関して留意すべき点は、このタイプの言語が常に流音を音素として 1 種類しかもたないということを意味するわけではない。たとえば基本的には側面音しかもたない言語でも、その側面音にたとえば通

<sup>1</sup> ちなみに、ロドリゲスは問題の流音について、日本語には r 音があって l 音がなく、一方中国語には l 音があって r 音が欠けることをすでに指摘している。

<sup>2</sup> 側面音と r 音の世界言語における様々な変種については Ladefoged & Maddieson 1996: 182ff., 215ff., また流音の類型論的な分類と音韻論的な一般化に関しては Maddieson 1984: 73ff. を参照されたい。

常の l に対して(硬)口蓋化あるいは軟口蓋化した l を区別したり、あるいは有聲の l と無聲の l が対立することがある。これは複式と単式を問わず、流音が当該言語の他の子音の相関関係の中に組み込まれる形でしばしば起こる現象である。しかし、このように二次的調音の付加によって生ずる流音の変種は、基本的な音種としての l 音と r 音の区別とは性質が異なる。従って、基本となる流音が 1 種類の場合は、かりに複数の二次的変種が存在しても、複式流音型とは認められない。つまり、単式流音型の言語は常に流音性音素が一個とは限らないのである<sup>3</sup>。

ところで、世界言語の中には、後に見るように、l と r の区別がないどころか、そもそも流音という音素を全くもたない言語もある。このようなタイプをここでは「流音欠如型」と呼び、流音の第 3 のタイプとして加えることにしよう。

さて現在筆者の手元に、世界言語の流音に関して約 1 千近い言語のデータがある。これらの言語を世界の主要な地域と系統別に分類して、上述の 3 つのタイプの出現頻度つまりそれぞれの言語数を示すと【表 1】のようになる。なお、この表で「漢語」とあるのは中国語諸方言の総称であり、また、系統的分類の困難な言語は地域的言語群としてまとめてある。特にアメリカ先住民語の場合は、単に北米、中米、南米というきわめて大まかな地域分類にした。これらの地域の詳しい内訳については、後の第 4 節で取り上げられるだろう。

さてこの表を見ると、世界言語における流音の 3 つのタイプは、地域および語族によってその分布が著しく偏っていることが分かる。これを整理してみると次のようになるだろう。

1) まず全般的に見ると、複式流音型つまり l 音と r 音を区別する言語は世界言語の大多数を占め、それを区別しない言語を大きく上回っている。特に、流音欠如型は、その言語数も現れる地域もきわめて限られている<sup>4</sup>。

<sup>3</sup>たとえば、ビルマ語には有聲の l と無聲の l が、ヒシカリヤナ語(南米)には有聲の r と無聲の r が、エンガ語(パプア系)には普通の l と口蓋化した l が、ネズパース語(北米)には普通の l と喉頭化音の l と無聲の l が区別されるが、流音のタイプとしてはいずれも単式と見なされる。

<sup>4</sup>筆者のデータでは、単式型の言語圏の調査に重点が置かれたために、このタイプの比率がやや高くなっている。このような偏りのない Maddieson 1984 のデータ(317 言語)で

地域	語 族	複 式	単 式	欠 如	合 計
ア	コ イ サ ン	1	5	2	8
フ	ニジェール・コンゴ	40	41	2	83
リ	ナイル・サハラ	33	0	0	33
カ	アフロ・アジア	40	1	0	41
ユ	インド・ヨーロッパ	78	0	0	78
	コーカサス諸語	36	0	0	36
	ドラヴィダ	13	0	0	13
	ウ ラ ル	20	0	0	20
	アルタイ諸語	37	3	0	40
ラ	チベット・ビルマ	25	25	0	50
	オーストロアジア	15	1	0	16
シ	タイ・カダイ	2	8	0	10
	漢 語	0	7	0	7
ア	ミャオ・ヤオ	0	8	0	8
	環日本海諸語	0	5	0	5
	チュクチ・カムチャツカ	2	3	0	5
	エスキモー・アリュート	2	5	0	7
大 洋 州	オーストロネシア	63	29	0	92
	パプア諸語	10	43	10	63
	オーストラリア諸語	30	0	0	30
米 大 陸	北米諸語	20	91	13	124
	中米諸語	46	22	2	70
	南米諸語	36	59	9	104
	孤立言語	11	0	0	11
	ピジン・クレオール	2	5	0	7
合 計		562	361	38	961
百 分 率		58.48%	37.57%	3.95%	100.00%

表 1: 世界言語における流音タイプの分布

2) 次に、世界で最も多くの言語を擁するユーラシアに目を向けると、西のヨーロッパからアジアの内陸部にかけて分布する主要な語族または言語群、すなわち、インド・ヨーロッパ、ウラル、アルタイ、ドラヴィダ、そしてコーカサスの諸言語は、ほぼ百パーセント複式流音型に属している。それに対して、単式流音型の言語はユーラシア大陸の東側の地域に集中している。もう少し具体的にいうと、単式流音型はユーラシアではこの大陸の太平洋沿岸部の言語にしか現れない。

3) このように、ユーラシアの諸言語は流音のタイプに関して、単式の太平洋沿岸部と複式の内陸部という2つの大きな言語圏に分けられるが、この2つの言語圏を世界全体の視野の中で眺めると、まずl音とr音を区別するユーラシア内陸部の言語圏は、アフロ・アジアという大語族を介してアフリカ大陸に延び、地理的にはサハラを含めたアフリカ大陸の北半分、語族としてはアフロ・アジアとナイル・サハラの二大語族を包含する。いわばアフロ・ユーラシア的な広がりを見せるこの複式流音型の言語圏は、そこからさらにオセアニアへと広がり、その中のオーストラリア大陸をその仲間に加えている。

一方、ユーラシアではその太平洋沿岸部に限られる単式流音型の言語圏は、その南ではオーストラリアを除く太平洋諸島、語族的にはオーストロネシア、およびニューギニアとその周辺諸島を占めるパプア諸語を含み、北方では、エスキモー・アリュート諸語を介して南北アメリカ大陸へと広がっている。

4) 最後に、流音欠如型の言語は、その分布地域がきわめて限られ、アフリカではサハラ以南、オセアニアではニューギニアを中心とするパプア語圏、そしてアメリカ大陸の一部の言語群に限られ、ユーラシアの諸言語では、このタイプはまったく現れない。

以上が流音タイプの地域および語族的分布の概略である。この中で複式流音タイプに属する上述の言語圏は、その内部がきわめて均質的であるが、その周辺部に広がる単式流音型および流音欠如型の分布圏は、その内

は、複式 62.0%、単式 33.9%、欠如型 4.1% (p.74)、また Ruhlen (1976b: 145) では複式型が 64% という数字になっている。

部が必ずしも一様でなく、同じ語族、同じ地域の中で2つのタイプが共存したりあるいは複式か単式か（または単式か欠如型か）区別の困難なケースも少なくない。以下このような点を考慮に入れて、まずユーラシアの太平洋沿岸部の諸言語から、流音タイプの実態をやや詳しく調べてみよう。

### 3 太平洋沿岸部における単式流音型言語

上に見たように、ユーラシアの単式流音型の言語はこの大陸の太平洋沿岸部に集中的に現れるわけであるが、これを地理的にもう少し正確に位置づけると、北はチュクチ・カムチャツカ半島を含むシベリア北東隅からロシア領沿海州を経て朝鮮半島、そこからさらに中国大陸を横切って南はインドのアッサム地方に延びる線を地図上に描いてみると、ほぼその東側がここでいう太平洋沿岸部に相当する。

#### 3.1 環日本海諸語

まず、日本列島とその周辺、先の分布表でかりに「環日本海諸語」と名付けた言語圏から見ていこう。表1でこの言語数が5となっているその内訳は、日本語の本土方言と琉球方言、アイヌ語、朝鮮語、そしてギリヤーク語である。

##### 3.1.1 日本語、アイヌ語、朝鮮語の流音

日本語のラ行子音は、すでに述べたように、最古の文字記録の現れた奈良時代以来ほとんど変化を受けず今日に至っている。また、現在北は本州の東北地方から南は琉球列島まで多種多様な変種を含む日本語の諸方言を見渡しても、たとえば琉球語のように、他の子音や母音に関して甚だしい変化を生じた方言の場合でさえ、ラ行子音だけはそのような通時的変化の域外に置かれてきた。琉球諸方言も本土の諸方言も、ラ行子音に関する限り、その調音上の性格に大きな違いは認められない。

周知のように、日本語のラ行子音は本来は語頭に現れなかった。そして語中の母音間での最も通常の発音は、舌先を一回だけ軽く歯茎に当てているゆる「はじき音」(flap)である。個人的ないし地域的に変異の大きい

は、漢字を含めてもっぱら外来語から広がった語頭のラ行子音で、これには l のような側面音からダ行音に近いそり舌的閉鎖音まで様々な変種が現れる。しかし、これは日本語のラ行子音にとってはむしろ二次的な現象にすぎない。

古くから同じ日本列島で話されてきたアイヌ語も、その流音は日本語と同じ単式であり、また、少なくとも現在のアイヌ語話者の発音から判断する限り、アイヌ語の流音と日本語のラ行子音の間には調音上ほとんど違いが認められない。ただ両者の間で異なるのは、アイヌ語では本来のアイヌ語彙でも語頭に流音が現れるという点だけである。いずれにせよ、日本列島は典型的な単式流音型の言語圏といえることができるだろう。

次に日本語と地理的にも歴史的にも最も近い朝鮮語を見ると、ここでも流音は明らかに単式である。ただし朝鮮語が日本語（およびアイヌ語）と異なるのは、朝鮮語の流音には音声的に r 音（はじき音）と側面音（l）という基本的な2つの変種があって、前者は音節初声（つまり母音の前）、後者は音節終声（つまり語末または子音の前）に現れるという形で、2つの音が音節環境によってはっきり使い分けられている。つまり朝鮮語では、音素レベルで流音は1種類であるが、音声レベルでは l と r が区別されるという比較的珍しい現象が見られる<sup>5</sup>。ただし、日本語には朝鮮語のような閉音節がないので、音節終声という環境は現れない。一方朝鮮語では、外来語の場合でもラ行音は語頭に現れないので、r 音が現れるのは語中の母音間だけとなり、この環境でのラ行音の発音は日本語とほとんど変わらない。従って、日本語と朝鮮語との違いは、流音というよりむしろ両言語における音節構造の違いに根ざしているといえよう。

### 3.1.2 ギリヤーク語の流音

最後にギリヤーク語は、現在はアムール川河口部と対岸の樺太北部にわずかの話者によって保たれるだけであるが、かつてはおそらくアムール下流域から沿海州にかけて広く話されていたものと思われる。このギリヤーク語の流音のタイプが複式と単式のどちらに属するかを判断するのは必ず

<sup>5</sup>興味深いことに、朝鮮語の流音とほとんど同じ現象が、インドのアッサム地方で話されるチベット・ビルマ系のガロ語にも見られる (Burling 1961: 8)。



しも容易でない。というのは、この言語には側面音/l/の他に、通常 [r] および [ř] で表記される音があって、これは少なくとも音声学的には r 音の部類に入れてもおかしくない音である。従って、その音素表を表面的に見た限りでは、ギリヤーク語には l と r の区別があると判断される可能性は十分にある。しかし、この言語の音韻組織全体の中で [r] および [ř] 音の振る舞いを仔細に観察すると、この2つの音が音韻的には流音と全く違った性格のものであることがはっきりする。以下簡単にその理由を述べよう。

ギリヤーク語には「弱音化」(lenition) と呼ばれる非常に複雑な子音の交替現象があって、それは通常、閉鎖音がある一定の音環境(または形態的環境)で対応する摩擦音に変わるという形で現れる。閉鎖音と摩擦音との間のこの交替の枠組みを図示すると【表2】のようになる。なお、閉鎖音の (I) は有気音(無声)、(II) は無気音(無声または有聲)であり、摩擦音の (I) は無聲音、(II) は有聲音である。

閉鎖音 I	p t c k q	閉鎖音 II	b d j g ɠ
摩擦音 I	ɸ ř s x ɣ	摩擦音 II	β r z ʎ ʙ

表 2: ギリヤーク語の子音交替

これで見ると、ギリヤーク語の [r] と [ř] は、それぞれ閉鎖音 [d] と [t] に対応する摩擦音として位置づけられていることがわかる。また音声的にも通常の r 音とは違って、舌先の振動を伴った摩擦音として実現されるようであり、特に [ř] はチェコ語の /ř/ に近いかなり粗擦性の強い音(ただし無声)といわれる(『大辞典』II: 1409)<sup>6</sup>。現在ギリヤーク語のこの子音交替はすべてが音声的条件によって起こるわけではなく、従って閉鎖音と対応する摩擦音は完全に環境変異音という関係にはない。しかし、通時的には摩擦音はおそらく閉鎖音の弱化によって発生したものと見られ、従って、ギリヤーク語の流音のタイプは単式型がその本来の姿で

<sup>6</sup>『大辞典』は三省堂『言語学大辞典』(世界言語編)の略。以下、この文献の場合は個別の執筆者名でなくこの略称によって示す。

あったと判断できるのである<sup>7</sup>。

## 3.2 環日本海以北の沿岸諸言語

### 3.2.1 チュクチ・カムチャツカ諸語の流音

ギリヤーク語のさらに北方、カムチャツカからチュクチ半島へと延びるシベリアの北東隅に今もなお話されているのがチュクチ・カムチャツカ諸語である。この小さな語族に属する言語として、南の方からイテリメン（またはカムチャダル）、コリヤーク、ケレック、アリュートル、チュクチという5つの言語が数えられる。この中で、コリヤーク語とケレック語は流音が一種類（通常 l で表記される）であるが、チュクチ語とアリュートル語には l の他に r 音も現れ、特にチュクチ語でその出現頻度が高い。なお、イテリメン語はいくつかの音韻記述を見ると l の他に r も加わっているが<sup>8</sup>、その r の現れるのは、管見の限り、ほとんどがロシア語からの借用語である<sup>9</sup>。

まず、チュクチ語の r が他の言語でどのように現れるかを見てみると、コリヤーク語では多くの場合 j で対応するが、ある種の子音結合では ě が現れることもある。たとえば、*Chukchi ruk* 「食べる」に対して *Koryak juk*, *Chukchi jarar* 「打楽器の一種」に対して *Kor. jajaj*, *Chukchi ewir?en* 「衣服」に対して *Kor. ewičən*, *Chukchi kətrakər* 「泡」に対して: *Koryak kəčhakəč*。しかし他の言語では、t, n, z など様々である。たとえば、*Chukchi ruk* : *Alutor tukku*, *Kerek nukku*, *Chukchi rintek* 「投げる」 : *Alutor tinlek*, *Kerek nintek*, *Chukchi rənengə* 「槌」 : *Alutor tnenga*, *Kerek inanga*, *Chukchi muri* 「われわれ」 : *Itelmen muza* など (Skorik 1979: 231f.)。

チュクチ語の r に関してもうひとつ特異な点は、この音を使うのはチュクチの男性だけで、女性のことばにはこの音はけっして現れない。すなわ

<sup>7</sup>ギリヤーク語の子音組織とその弱音化については、Austerlitz 1990: 177, Blevins 1993, Gruzdeva 1998: 11ff. を参照。ちなみに、現在すべてのギリヤーク語話者がロシア語との2言語併用者となり、しかも主言語がロシア語という状況 (Gruzdeva 1998: 8f.) では、この言語本来の音体系はもはや失われたと言えるかもしれない。

<sup>8</sup>たとえば、Volodin & Zhukova 1968: 335, 『大辞典』 I: 635 など。

<sup>9</sup>Austerlitz 1986: 33 に示されたイテリメン語の音韻図には r は見られない。

ち、チュクチの女性は男性語の r と ě に対して常に c [ts] を用い、このため両者のことばは著しく異なった風聞こえるという (Bogoras 1922: 665)。同じくボゴラスによると、コリヤーク語の民話の中で r 音を発するのは、ある種の怪物と悪霊だけである (Ibid: 669)。

こうした社会言語学的な注記を見ると、チュクチ・カムチャツカ語の中でこの r 音はかなり特異な音として性格づけられていることが分かる。目下のところ筆者には、上に見られるような対応のデータから問題となる音の通時的な背景を正確に推定することはできないけれども、おそらくチュクチ語の r は、口蓋的な摩擦音あるいは鼻音からの二次的な発達ではあるまいか。同じような通時変化は、後に見るように中国語の北方方言にも起こっている。なおオウステルリッツは、チュクチ語には r があって s が欠けている点に注目し、この r はある種の摩擦音の代用として現れたのではないかと推定している (Austerlitz 1986: 33)。このようにチュクチ語 (およびアリュートル語) の r 音が二次的な発達であるとすれば、チュクチ・カムチャツカ語の流音のタイプは、ギリヤーク語と同じく本来的には単式型であると見なすことができる。

### 3.2.2 エスキモー・アリュート諸語の流音

北方沿岸部の極北に位置するのはエスキモー・アリュート諸語である。この語族に関する手元のデータで見ると、アラスカのエスキモー語 (Alaskan Yupik, Alaskan Inuit)、グリーンランドのエスキモー語 (Greenlandic Inuit)、カナダ西部のエスキモー語 (Labrador Inuktitut) そしてアリューシャン列島に分布する東アリュート語では、流音は側面音だけで r 音が欠けている。それに対して、チュクチ半島先端部で話されるエスキモー語 (Siberian Yupik) とカムチャツカ半島沖のコマンドル諸島で話される西アリュート語には上記言語の側面音の他に r 音が現れる。この2つの言語は、いずれもロシア領に属し住民のロシア語化が急速に進んでおり、特にコマンドル諸島のひとつメドニ島 (Copper Island) は、ロシア語とアリュート語の特異な混合語が行われていることで早くから知られている<sup>10</sup>。

<sup>10</sup>最近の文献では、Golonko & Vaxtin 1990, Sekierina 1994などを参照。

この語族における r 音のこのような分布を見ると、アラスカ、カナダ、グリーンランド、アリューシャン列島というこの語族の大部分の分布地域に共通する流音のタイプ、つまり単式流音型がこの語族に本来のものであり、シベリアとコマンドル諸島に見られる r 音は、ロシア語の影響によって生じたものと考えておそらく間違いないだろう。

ただしエスキモー語で注意すべきは、これらの言語に共通して現れる後部軟口蓋音（または口蓋垂音）に /q/（閉鎖音）、/χ/（無声摩擦音）、/ɸ/（有声摩擦音）の3種があり、この内の摩擦音はしばしば r で表記される。たとえば、グリーンランド・エスキモー語の音韻表記で有声摩擦音は通常 /r/ で表記され (Fortescue 1984: 334)、またアラスカ・エスキモー語の正書法では、有声摩擦音が r、無声摩擦音が rr で表記される (Miyaoka 1996: 338)。これらの音は、音声的にはおそらくフランス語その他一部のヨーロッパ諸言語に見られる口蓋垂接近音の r 音に非常に近いものと思われるが、それぞれの音体系の中で占める位置は全く違うのである<sup>11</sup>。

### 3.2.3 沿海州のツングース語

北方沿岸諸言語の最後に、沿海州で話される一部ツングース語の流音について触れておきたい。ツングース語は他のアルタイ系諸言語と同じように、少なくとも現存諸語の比較に基づく限り、その祖語の段階から流音に側面音と r 音の2種類をもっていたと考えられるが、太平洋沿岸部の一部の言語で祖語の r 音を失って流音が一種類だけになったと見られる言語がある。すなわち、ひとつはアムール川下流域北部で話されるネギダル語、他はアムール川中流およびウスリー川の東岸から太平洋岸にかけて分布するオロチ語とウデヘ語である。

以下の対応例で見られるように、他のツングース語の r はこれらの言語で j またはゼロとなって現れる。すなわち、

*Evenki diram, Nanai dirami, Uilta jirami, Manchu jiramin* に対して  
*Negidal dijam, Udehe deæmi, Orochi dijami* 「厚い」  
*Evenki giramna, Nanai girmaksa, Uilta girapsa, Manchu giranggi*

<sup>11</sup> Miyaoka 1996: 338 によれば、アラスカ・エスキモー語の /ɸ/ はフランス語の 'r grasseyé', /χ/ はフランス語の quatre の r に近いという。

に対して

*Negidal gijamna, Udehe geæmaha, Orochi giamsa* 「骨」  
*Evenki goro, Nanai goro, Uilta goro, Manchu goro* に対して  
*Negidal gojo, Udehe goo, Orochi goo* 「遠い, 遠く」<sup>12</sup>

アルタイ語圏の最も東方に位置する沿海州のツングース語に現れたこの現象は、類型地理学的な観点から見てもきわめて興味深いものがある。なぜならこのような r 音の消失は、これらの言語の内部的な変化というよりはむしろ、いわば環日本海というひとつの地域に組み込まれたためにその地域特徴におそらく同化された結果ではあるまいか。換言すれば、これらのツングース語は、本来 r 音をもたないつまり単式流音型の古い土着の言語の上に被さる形で形成された。そして消滅したその土着語は、おそらくギリヤーク語かあるいはそれに近い言語だった可能性が高いといえよう。

### 3.3 中国および東南アジア大陸部の諸言語

#### 3.3.1 中国語の流音

すでに見たように、中国語はもともと流音は半舌音と呼ばれる「来母」一種類だったと見られ、この単式流音型は現在でも大部分の中国語諸方言で維持されている。しかし、現代の北京語に代表される北方方言には、r 音に類する音が出現しており、これを音韻的にどう位置づけるかはなかなか微妙である。

これは中国の韻書で「半齒音」（日母）と名付けられた音で、「日」「児」「人」「然」などの頭子音がそれである。現在の標準的な北京語でこの音は、そり舌の有声摩擦音（または接近音）で発音され、ローマ字表記では通常 r で表されている。一方日本の漢字音で、これらの漢字はいわゆる呉音で「ニチ」「ニ」「ニン」「ネン」、漢音で「ジツ」「ジ」「ジン」「ゼン」となっていて、その違いが大きい。これらの漢字が上古音で頭初に鼻音 n をもっていたことは確実であるが、それがどのようなプロセスで現在の北京語に見られるような一種の r 音に変わったかが問題である。これには諸説があるようであるが、私見では、後続母音の影響で口蓋化した鼻音（た

<sup>12</sup> 対応例は『大辞典』II: 1075f. による。

たとえば [nj]) がそのわたりの部分で摩擦を強め、この摩擦音が最終的に鼻音を失ないかつそり舌化するという形で起こったのではなからうか。j のようなわたり音が摩擦を強めて ʒ のような音に変わる変化は、たとえばラテン語からロマンス語へ移行する段階でも広範に起こり（たとえば、ラテン語 *juvenis* > フランス語 *jeune* [ʒœn]）、音変化としては特に珍しいものではない。

それよりも、中国語のこの r 音に関してもっと興味深いのは、このような音変化が中国語圏の特に北方で起こったという事実である。中国語はこの地域で周辺のアルタイ諸語と隣接し、両者の間で様々な形の接触が長期間にわたって行われたことはよく知られている。とすれば、先の沿海州の場合と同じように、言語接触による流音タイプの変化がここでも起こったと考えてよいのではないか。しかしこの場合は、変化は逆の方向で行われた。すなわち、ここではアルタイ語を話す（政治的には支配的な）新来者が言語的に中国語化する過程で母語の調音傾向を中国語に浸透させた。伝統的な用語を使えば、沿海州では基層 (substratum)、北方中国語では上層 (superstratum) の作用ということになる。たとえば、北部フランス語に与えたゲルマン語の影響を想起されたい。

ところで、中国語は系統的にはその西・南方に広がるチベット・ビルマ語族とつながり、シナ・チベットという大語族を形成する。そこで今度は、このチベット・ビルマ諸語における流音のタイプを取り上げることにしよう。

### 3.3.2 チベット・ビルマ諸語の流音

この語族に関する手元のデータでは、表1で示したように、l と r を区別する複式流音型の言語が 25、それを区別しない単式流音型が 25 となって、2つのタイプがまさに拮抗している。ただし Grimes (1996) によれば、チベット・ビルマ諸語の総数は 345 となっているので、50 という数はこの語族全体から見るとけっして十分とはいえない。

従って、その語族内の流音の分布について、目下のところ必ずしも正確を期し得ないけれども、概略的にいうと、まず単式流音型は、中国南部の

四川省、貴州省、雲南省からタイ北部とビルマにかけて分布する「ロロ・ビルマ語群」、ビルマ北部からインドのナガランドを経てアッサム北東部にかけて分布する「ボド・ガロおよびナガ・クキ語群」<sup>13</sup>、そしてビルマ東南部からタイの国境地帯にかけて分布する「カレン語群」という3つの言語群に集中している。それに対して複式流音型の言語は、ほとんどがこの語族の西方群、すなわち中国北西部からチベット、ヒマラヤ地域にかけて分布する「チベット・ヒマラヤ語群」に属している。つまり、この語族の場合は、流音のタイプに関して東西2つの地域がかなりはっきりと区分され、その東には単式が西には複式が現れるという形になっている。流音のタイプが同じ語族の内部をこのように真二つに分割するのは、ユーラシアの主要語族の中ではこの語族だけである。

なお、この中の東のグループについて見ると、地理的に最も東方に位置するロロ・ビルマ語群の大部分の言語は、中国語のような側面音だけをもつ単式型に属すると見られるが、ボド・ガロ、ナガ・クキ語群には単式と複式の両タイプが共存し、カレン諸語の場合も同様である。

カレン語については Jones (1961: 79ff.) にやや詳しい比較研究があり、これによるとカレン祖語には l と r の2つが再構されている (p.100)。このうち l の対応は言語間で全く安定していて問題ないけれども、r の対応はきわめて不確かである。今、カレン語の6つの方言の語頭における r 音の対応を見てみると、Taungthu の /r/ に対して、Palaychi は /r/ または /ɣ/, Moulmein Pho, Bassein Pho, Moumein Sgaw は /ɣ/, Bassein Sgaw は /ɣ/ または /h/ という対応を示している (p.93)。このような対応を見る限り、カレン語の r 音がもともと流音としての性格をもっていたかどうかはきわめて疑わしい。おそらく一種の摩擦音に遡るのではなからうか。

チベット・ビルマ語の場合、最後に残された問題は、複式流音と単式流音のどちらのタイプがこの語族に本来のものだったか、つまり、これらの言語の祖語の状態がどうだったかということになるだろう。Delancey

<sup>13</sup> シェーフアの分類では Baric と呼ばれている語派である (Shafer 1976: 7f.) .

(1987: 804) によると、チベット・ビルマ祖語の子音体系は【表3】のように再建されている。また、Benedict (1972: 13) が提示した体系もこれとほぼ同じである。

閉鎖音	p	t	k	b	d	g
摩擦音	s	z				
鼻音	m	n	ŋ			
流音	l	r				
半母音	w	y				

表 3: チベット・ビルマ祖語の子音体系

このように、チベット・ビルマ祖語に2種類の流音を立てることは、現在ではほぼ定説とされている。とすれば、この語族の東のグループに現れた単式流音型は、これらの地域で起こった言語改新、つまりもとあった流音の区別が何らかの形で失われた結果だと見なければならぬ。実際、この言語改新は、ロロ・ビルマ語群では、r音が半母音yに変化するという形で起こり、ビルマ語の場合、12世紀に遡る古ビルマ語の段階でr音はまだ保たれていたようである(『大辞典』III: 596)。

### 3.3.3 シナ・チベット語族における中国語の位置

中国語は東アジア最大の言語であり、歴史上に果たしたその役割と周辺諸言語に及ぼしたその影響力の大きさから、チベット・ビルマ語とは一応別格の扱いを受けているけれども、系統的な観点からは、チベット・ビルマ語の一形態とみて差し支えないだろう。従って、中国語の場合も、記録時代に現れたその流音のタイプはこの言語にとって本来の姿ではなく、もとあったlとrの区別を失った結果だと判断しなくてはならない。この区別の消失がどのようなプロセスで生じたか、正確なことはよく分からない。それは、lとrが単純に合流するというような形ではなく、様々な音環境に応じてかなり複雑な条件変化を伴い、またある種の環境(たとえば語末)では、lとrの区別が漢の時代まで保たれていたらしい(Bodman 1980: 75ff.)。



いずれにしても、チベット・ビルマ（あるいはシナ・チベット）語族の東方群で起こった複式から単式へという形の流音タイプの変化は、この語族の純粋に内部的な要因だけで説明するのは無理であろう。これは当面の流音という音韻現象だけに限らない。すなわち、この語族の北方では中国語、南方ではカレン語において、語順のタイプを含めた文法構造の全般にわたって、チベット・ビルマ語本来の姿とは全く違った言語タイプが現出している。とりわけ中国語の名詞や動詞における形態法の完全な消失や語の徹底した単音節化というような現象は、言語接触、それもクレオール化と呼ばれるような言語混合を伴った激しい接触的变化なしにはおそらく起こり得なかったであろう。このような言語変化はもちろんこれらの地域ですべて一律に起こったわけではなく、時代により地域によって様々に異なった形をとったに違いない。

しかしともかく、チベット・ビルマ諸語が広がる以前からこれらの地域の一帯には、それとは系統的にも構造的にも異なった言語が行われていたことはほぼ確実であり、またその多くは、中国語に吸収されるという形で姿を消したと思われる。しかし現在、中国南部からインドシナ半島にかけて分布する「ミャオ・ヤオ」や「タイ・カダイ」<sup>14</sup>と呼ばれる諸言語は、中国語がこの大陸に拡散する以前から、少なくとも中国南部に古くから行われていた諸言語の残存と見てよいだろう。中国語との構造的類似や一部の共有語彙に基づいて、これらの言語を系統的に中国語と結びつける一部に根強い見解は、言語接触によって生じた共通特徴（つまり借用）と同源関係に基づく共有特徴とをおそらく見誤った結果であり、筆者としては支持することはできない。

### 3.3.4 ミャオ・ヤオ諸語とタイ・カダイ諸語

ミャオ・ヤオ諸語とタイ・カダイ諸語のうち、特に後者のタイ諸語以外の言語についての情報はきわめて不十分である。

タイ・カダイ諸語のデータの中で、側面音 l の他に r 音を音素としても

<sup>14</sup> 「タイ・カダイ」はベネディクトの命名に由来する (cf. Benedict 1975: 438)。最近では語族の総称としては Daic という方が一般的であるが、仮名書きでは落ち着きが悪いので旧称をそのまま用いる。

つ言語は、タイ北東部に位置する Saek と Yay の 2 言語であるが、これらの言語についての詳細は目下のところ不明である。現代のタイ語は、バンコクを含めた南部の方言には l と r の区別が存在するが、中部以北には区別が見られないという (『大辞典』 II: 532)。

タイ諸語の音韻比較とその通時的背景については、Li (1977) に比較的詳しい研究が見られる。これによると、現在のタイ諸語の一部に見られる l と r の対立はタイ祖語に遡るとされ、他の言語では r は l と合流するか、あるいは摩擦音  $\delta$ ,  $\gamma$ ,  $h$  に変化することによって消失したという (同書 142ff.)。Li はこの音を「強い摩擦を伴った舌先のふるえ音」と推定しているが、多くの言語でこれに対応する音が上のような摩擦音で現れている点に注意を払う必要がある。同様の現象は先のカレン語にも見られ、またギリヤーク語や中国北方方言における r 音発生の過程にも観察された。従って、タイ祖語で r で表された音は、音種としては共鳴音 (sonorant) というよりはむしろ摩擦音のカテゴリーに属する音と見るべきであろう。

カダイまたはカム・スイと呼ばれる言語群は、必ずしも素性のはっきりしない様々な言語を含んでいる<sup>15</sup>。手元の資料を見る限り、現在話されているこれらの言語には流音は側面音だけである。また言語間でのその対応も安定している。しかし、ある種の摩擦音の対応に基づいて祖語の段階に一種の r 音を推定しようという試みも一部に見られる。

たとえば、*Lakkja*  $\text{ja:k}$ , *Mulam*  $\text{ʔya:k}$ , *Maonan*  $\text{ʔjek}$ , *Sui*  $\text{ʔya:k}$ , *Kam*  $\text{ja:k}$  「タロイモ」に対して \* $\text{p-ra:k}$  を、同じく *Mulam*  $\text{ɣo}$ , *Maonan*  $\text{ʔwo}$ , *Sui*  $\text{ʔyo}$ , *Kam*  $\text{jo}$  「知る」に対して \* $\text{h-ro}$  というような祖形を想定する解釈である。しかし、単独の \* $\text{r}$  を想定させるに足る言語間の対応は見いだされない (Edmonds & Yang Quan 1988: 158, Thurgood 1988: 191)。また、このような音がかりにこれらの言語の祖語に想定されたとしても、それは本来の流音とは全く性格の違った音といわなければならないだろう<sup>16</sup>。

<sup>15</sup> ヴェトナム北部から中国の貴州省、広西省さらに海南島の一部に分布し、Grimes (1996) では約 20 の言語を数える。

<sup>16</sup> なお、Matisoff 1988 によると、海南島の Hlai (または Li) 語の方言の中に l の他に一種の r 音が出現しているが、Matisoff はこの音の本来の性格を摩擦音の一種と見ている

### 3.3.5 オーストロアジア諸語

大陸部の東南アジアで残されたもうひとつの大きな語族はオーストロアジアである。この語族はインド東部に分布するムンダ系とインドシナ半島およびニコバル諸島のモン・クメール系の2つの大きなグループに分けられる。この語族に関する手元のデータもきわめて貧弱であるが、流音のタイプについては、この語族中最大の話者人口をもつヴェトナム語は側面音だけの単式流音型であり、一方モン語、クメール語などのモンクメール語派の主要な言語、そしてインドのムンダ諸語はlとrを区別する複式のタイプである。ただし、ヴェトナム語以外のヴェト・ムオン諸語とタイの北部に分布するパラウン語群、またマレー半島に散在するアスリ諸語については、目下のところ正確な情報が得られない。

これらの語族の本格的な比較研究はほとんど手が着けられていないといつてよい状況なので、東のヴェトナム語と西のモン・クメール諸語との間の流音タイプの違いがどのような通時的背景によって生じたかについては、今のところ不明とせざるをえない。なお、これらの言語は非常に古くからサンスクリット語を中心にインド語の影響を強く受けてきたので、この点も考慮する必要があるだろう。ちなみに、ムンダ語の流音は、r音に舌先のふるえ音とそり舌のはじき音を区別する完全にインド的なタイプである。

### 3.4 オーストロネシア諸語の流音タイプ

ユーラシアの太平洋沿岸部で残された最後の言語圏はオーストロネシア語族である。この言語を話す民族は、最近の学説では、もともと中国南部あたり的大陸部に発祥し、ここからまず台湾に移り、さらにフィリピン、インドネシア、メラネシアへと南下し、このメラネシアを第二の拠点としてここからさらにミクロネシアやポリネシアの島々に拡散したといわれる。この語族はその分布地域と包含される言語数の大きさにおいて世界最大級の語族であり (Grimes 1996 では言語数 1236)、当面の流音特徴に

関しても、語族内部でのその現れ方はけっして一様ではない。

今手元のデータに基づいてそれを概略すると、単式流音型（その流音は多くの場合側面音）は、地理的にこの語族の周辺部を占める台湾、フィリピン、そしてポリネシアの諸言語にほぼ集中している。特にポリネシアのほとんどの言語は流音を一種類しかもたない。それに対して複式流音型は、インドネシアの大部分の言語とミクロネシアおよびメラネシアの一部の言語を包含する。流音のタイプに関してオーストロネシア語族内部に現れたこの違いは、どのような通時的背景をもっているのだろうか。

まずこの語族の流音を代表する側面音 l は、各言語間での対応が非常に明瞭でしかも安定しており、祖語にこの音素を立てることに全く問題がない。たとえば、タガログ語 langit, マレー語・ジャワ語 langit, フィジー語・トバ・バタク語・サモア語 langi, 祖語 \*langit「空」<sup>17</sup>。

一方、l と区別される r の言語間での対応はきわめて複雑かつ不規則で、これをどう解釈するかは、オーストロネシア比較言語学の大きな難問となってきた。主としてインドネシア諸語に現れる r 音は、その内部および他の諸言語との間で、たとえば次のような形の対応を示している（【表4】参照。例は『大辞典』I: 718による）。

オーストロネシア語学者の間で、この対応の左側（A）は「RGHの対応（法則）」、右側（B）は「RLDの対応（法則）」と呼ばれ、その解釈とそこから導かれるオーストロネシア祖語の子音音素をめぐって多くの論議が続けられてきた<sup>18</sup>。デンプヴォルフは、A類の対応に対して \*y を、B類に対して \*l または \*d というような音を祖語に想定した。それに対してダイエンは、デンプヴォルフの y に対して \*r, l に対して \*r, d に対して \*D を立てている<sup>19</sup>。

再構された祖語の音素というものは、対応に対して与えられた一種の符号のような性格があって、それがどのような音声・音韻的実体を表すか

<sup>17</sup>ただし、単式流音型の一部の言語では、この音は舌先のはじき音 r でも現れる。たとえば、マレー語、タガログ語、チャモロ語、サモア語等々の lima に対してマオリ語、ラバヌイ語、アミ語 rima（「5」または「手」）

<sup>18</sup>泉井 1955 が指摘しているように、この対応は実際はもっと複雑である。

<sup>19</sup>これらの対応と祖語音素の解釈については、泉井 1955, Dyen 1953, Dyen 1971: 22f., Milner 1963, Dahl 1976: 86ff., 『大辞典』 I: 718, 1050 などを参照。

言語名	A類「筋」	言語名	B類「稲」
マレー語	urat	ジャワ語	pari
トバ・バタク語	urat	マカッサル語	pare
マッカサル語	ura'	ンガンジュ語	paräi
アミ語	orat	マラガシュ語	vary
イロカノ語	urat	タガログ語	palay
タガログ語	ugat	カパンパンガン語	pale
チャモロ語	gugat	マレー語	padi
ンガンジュ語	uhat	バリ語	padi
サンギル語	iha	トバ・バタク	pa(l)ge
ガヨ語	uyöt	イロカノ語	pagay
カパンパンガン語	uyat		
ジャワ語	ot-ot		
バリ語	uat		

表 4: オーストロネシア諸語の r 音対応

について全く保証されていない場合がしばしばある。オーストロネシア祖語に想定された“r音”はまさにその典型であって、それが真に共鳴音(sonorant)としての流音という性格をもっていたという保証は全くない。同じような対応の現象とそれに基づくr音再構の試みは、すでのカレン語やタイ・カダイ諸語の場合にも見られた。しかし、それらの音はいずれも流音というよりもむしろ阻害音(obstruent)の部類に入ると解釈すべきであろう。

本稿の冒頭でも述べたように、言語音の中で流音と呼ばれる音類は、それぞれの言語の音体系の中で独自の地位を保ち、いったん音素として確立されると非常に安定度が高い。ほかの子音、たとえばdやzなどがrに変わる「ロータシズム」と呼ばれる音変化は、いろいろな言語で頻繁に起こっているけれども、逆にrがほかの閉鎖音や摩擦音に変わるという変化はきわめて稀である。従って、インドネシア諸語に現れるr音の場合も、祖語の流音に遡ると見るよりは、おそらく、A群のrは、デンプヴォルフが想定したように、軟口蓋(または後部軟口蓋)摩擦音、B群のrは摩擦音(または弱音)化したdから二次的に発生した見てよいのではないか。先に見たエスキモー語やギリヤーク語における“r音”の発生がその身近な例である。またインドネシアにおけるr音の成立には、サンスクリット

語やアラビア語の影響という側面も無視できないかもしれない<sup>20</sup>。

以上、ユーラシアにおける単式流音型の現れる言語圏を概観した。これで見ると日本列島に典型的に現れる単式型流音の分布圏は、北はエスキモー・アリュートからチュクチ・カムチャツカ、環日本海諸語、ここからさらに、シナ・チベット語族の中の東のグループ、ミャオ・ヤオ、タイ・カダイ、ヴェト・ムオン諸語、そして広大なオセアニアに分布するオーストロネシア大語族へとつながっている。もちろんこの言語圏は、流音のタイプに関して完全に均質一様というわけではない。すでに見たように、一部の言語は、この地域に組み込まれることによって本来もっていた流音の区別を失い、また別の一部は、内部的ないし外部的な要因によって新しい流音をすでに発生させたかあるいは発生途上にある。

では次に、単式流音型の現れる別の地域に目を向けてみよう。

#### 4 アメリカ大陸

ユーラシア太平洋沿岸部の北限はエスキモー・アリュート諸語を介してアメリカ大陸とつながっている。そして、南北に広大な広がりをもつこのアメリカ大陸は、ユーラシアの太平洋沿岸部と並んで単式流音型が現れる最も大きな言語圏を作っている。ここでいうアメリカの言語は、もちろん白人の到来以前の先住民言語を意味し、その地域的な分布についても、コロンブス以前の状況を推定、復元しなければならないことはいままでもない。

<sup>20</sup> rがdの交替(または弱化)音として二次的に発生するという現象は、いろいろな言語に見られる。たとえば、フィリピンのタガログ語は現在はlと区別されるrをもっているけれども、このrはスペイン語などからの借用語を除けば、もっぱらdの交替音として生じたものようである。この交替は、本来のdがいろいろな形態的条件によって母音間に置かれるという場合に起こっている。たとえば、

lubid「縄」	lubirin「縄をなう」
palad「掌」	papalaran「運命」
tawad「容赦」	patawarin「許す」
tukod「藤」	tukuran「藤に使う」

また、タガログ語の指示代名詞 dito, dine, diyan, doon の語頭の d は、文中の位置では自由に r で置き換えられる (Schachter & Otones 1972: 25)。

なおフィリピン祖語の子音体系については、Constantino 1971: 123 を参照。そこに r を立てるかどうかが著者は態度を保留している。

#### 4.1 北米諸語の流音タイプ

まず北米から見ていくと、北の方からエスキモー・アリュート諸語に接してアラスカからカナダ西部の太平洋側にはアサバスカ語族に属する言語が広く分布し、またこれに接して、カナダのブリティッシュ・コロンビア州から合衆国のワシントン州、オレゴン州に及ぶアメリカ北西海岸には、ハイダ、ツィムシャン、ワカシュ、セイリッシュの諸言語と共に、系統関係の定かでない孤立ないし小言語群が密集している。これらの言語はサピア以来の大分類では「ペヌート」という大語族にまとめられ、その分布はカリフォルニアまで及んでいるが、このペヌート諸語と接してカリフォルニア南部からアリゾナ、メキシコ北部にかけて分布する同じく系統の定かでない諸言語は、「ホカ大語族」としてまとめる分類も行われた。

このように北米の太平洋側は、アサバスカ（あるいはナデネ）語族を除いて、その系統関係と地理的分布がきわめて複雑であるが、それに対してこの大陸の内陸部から東部大西洋岸にかけての言語分布はそれほど複雑ではない。すなわち、カナダ中・東部から合衆国東部はアルゴンキンとイロコイの2大語族、合衆国中部の平原地帯はスーおよびカド語族、その東に接する大盆地から南西部に至る地域はユート・アステカ語族によって占められている。ただし、この南西部からメキシコ湾に至る地域は「湾岸諸語」と呼ばれる北米でもうひとつの小言語密集地帯となっている。

さてこれら北米諸語の流音タイプは、第2節で挙げた分布表（表1）を見ても分かるように、単式流音型が圧倒的に多い。一方、流音に側面音と並んでr音を区別する複式型は全部で20を数えるが、このうちの約半数はホカ諸語に属し（うち6はユマ諸語）、他はアサバスカ、セイリッシュ、ペヌート諸語などに散発的に見られるだけである。ホカ諸語の場合も、単式が13言語に対して少なくとも表面的に複式と判断されるのが9言語であるから、全体としては単式型が優勢である。なおこのホカ系諸言語は北米言語の中では研究が最も遅れており（すでに多くの言語が消滅している）、資料も少なく、またこれまでになされた音声記述にも不正確なもの

が多いようである。内部の本格的な比較研究もほとんど進んでいない。

ともあれ流音に関しては、このホカ語群（の中のユマ語族<sup>21</sup>）を除くと、北米には複式流音型の言語はほとんど現れないといつてよいだろう。特に、アサバスカ語族からペヌート大語族に至るアメリカ大陸の太平洋側の諸言語は、ほぼ完全に単式流音型に属している。それに対して、内陸部から大陸東部に分布する言語の中には、単に流音の側面音と r 音の区別が欠けるだけでなく、流音そのものを欠如する言語がかなり見られる。

手元のデータでは、北米で流音を欠くのは 13 言語である。その内訳は、アルゴンキン語族に 6 (Blackfoot, Cheyenne, Arapaho, Cree, Ojibwa, Menomini), スー語族に 3 (Crow, Omaha, Biloxi), イロコイ語族に 1 (Seneca), ユート・アステカ語族に 3 (Shoshone, Northern Paiute, Southern Paiute) となっている。特にアルゴンキン語族の場合は、データに含まれたすべての言語が流音欠如型である。ちなみに、筆者の流音データの中で、ひとつの語族が全体として流音を欠くのはこのアルゴンキンだけである<sup>22</sup>。なお、スー語族の場合は、単式流音型 5, 欠如型 3, イロコイ語族は単式 3, 欠如型 1 となっている。

これらの語族における流音の欠如が通時的にどのような背景をもつかにについては、目下のところ十分な判断材料を持ち合わせていないが、一般に流音はひとたび音素として確立されると、音体系の中できわめて安定した位置を保ち、他の音に変化したりあるいは消失することも稀である。このような点を考慮すれば、少なくともこれらの語族の一部において、流音の欠如はもとあったものが消失した結果ではなく、むしろ祖語にまで遡る古い特徴である可能性が高いといえよう<sup>23</sup>。いずれにせよ、北米大陸の流音のタイプは、概略的にいうと、この大陸の太平洋側はきわめて等質的な単式流音型に属し、一方その内陸部から東側には、単式型と並んで流音欠如型の言語がかなり集中的に現れている。

<sup>21</sup>主に合衆国アリゾナ州からメキシコにかけて分布する。

<sup>22</sup>【補注】その後の調査で、この語族の東部方言に属するパサマクォディ語 (Passamaquoddy-Maliseet) に側面音 1 の存在することが判明した。

<sup>23</sup>Campbell & Mithun 1979: 71ff. によると、再構されたアルゴンキン祖語の子音体系の中に /l/ が現れているが、これはどうやら流音ではなく /θ/ に対応する有声の摩擦音として立てられている。おそらく d 音の弱音化したものであろう。



## 4.2 中米諸語の流音タイプ

次に中米は、概略的に、ユート・アステカ語族の南グループ (Pimic, Taracahitic, Corachol, Aztecán) がメキシコの北・中部を占め (これに孤立的なタラスコ, トトナック, テペワなどの小言語群が混じる), 一方メキシコ南部の太平洋側にはオト・マング語族, メキシコ湾に面したユカタン半島からグアテマラ東部にかけてマヤ語族が分布し, この両語族に挟まれてミヘ・ソケ語族がやや複雑な分布を見せる. 他に, ホンジュラスからパナマにかけて, ミスマルパ, アラワック, レンカ, チブチャなどの言語群が分布するが, これらは系統的にはむしろ南米に所属する言語である.

この地域はアメリカで最も早く都市文明が発達し, マヤ, アステカなどの王国が栄えて人口密度も高かった. そのために早く白人の占拠するところとなり, 言語面でもスペイン語による征服が最も早くから進められた. 手元のデータを見ると, この中米地域だけは, 流音に l と r を区別する言語の数が区別しない言語の数を大きく上回っている<sup>24</sup>. しかし, ここに現れた複式流音型はどうやら表面的な疑似現象で, その多くはスペイン語の影響によって生じたものようである. 従って, これらの言語の場合は, できればその祖語にまで遡ってそれぞれの語族に本来の音韻組織を復元しなければならない<sup>25</sup>. ちなみに, Kaufman (1977: 77) が中米の言語の最も平均的な子音組織として示した音韻図は【表5】のようになっている.

閉鎖音	p	t	c	k	ʔ
摩擦音		s		h/x	
鼻音	m	n			
流音		l			
半母音	w		y		

表 5: 中米諸語の平均的子音組織

これらの言語に関してこれまで諸学者によって試みられた様々な音韻組

<sup>24</sup> Yasugi 1995: 41 に示された中米言語の流音に関する統計によれば, 複式流音型 109, 単式流音型 60, 流音欠如型 5 が数えられる.

<sup>25</sup> 中米言語の音韻面におけるスペイン語の影響については Suáres 1983: 41 参照.

織の再構については、Longacre (1977) や Campbell (1979) に要を得た概観が見られる。ただそこには再構の基盤となる対応のデータが示されていないので、その信憑性について必ずしも保証できない。ともあれ、ここでとりわけ興味深いのは、中米の中心部に位置するオト・マンガ語族とミヘ・ソケ語族で、再構されたその子音組織の中には流音が見られない（オト・マンガについては Longacre 1977: 114, Campbell 1979: 914, ミヘ・ソケについては Longacre 1977: 101f., Campbell 1979: 928）。他に、ユート・アステカ祖語 (Steele 1979: 454) およびトトナック語 (同: 925) は側面音だけの単式流音型である。一方、再構されたマヤ祖語の“最も広く受けいられている”子音体系の中には l と並んで r が見られるが (Campbell 1979: 934), 近年解読の進んでいるマヤ文字を見ると、流音は 1 種類しかないようである。

#### 4.3 南米諸語の流音タイプ

最後に南米は、アメリカ大陸の中でこれまで研究が最も遅れ、諸言語の記述資料に関しても系統的分類に関しても著しく情報が不足している。一説によれば、白人到来時の南米の人口は少なく見積もっても 1500 万、言語数はおよそ 1500 (言語集団の数でいえば 5000 以上) と推定され、その中で現在 500 前後の言語が残存しているという。カウフマンによれば、これらの言語を分類すると、全部で 118 の「系統的単位」が数えられ、その中の 70 が単一の孤立言語である (Kaufman 1994: 46)。もちろんこれとは別の巨視的な分類も試みられているが (たとえば, Greenberg 1987), いずれにしても地図上に描かれた南米言語の分布は、地球上で最も複雑な様相を呈しているといつてよいだろう。

さて、手元のデータでは、南米諸語の流音のタイプは複式が 36, 単式が 59, 欠如型が 9 となっていて、ここでも単式流音型が圧倒的に優勢である。一方複式流音型は、地理的に見ると前述の中米の東南部から南米大陸北西部のコロンビア, エクアドルにつながる地域に分布するチブチャ系およびパエザ系の諸言語, 次いでこのエクアドルからアンデス山地一帯に広

く分布するケチュア系およびアイマラ系の諸言語の中に集中している。このうち、チブチャ諸語は単式と複式が相半ばしているが(8対8)、後の3つの言語群は、手元のデータで見る限り、単式型はほとんど現れない。このアンデス地域は、周知のようにインカ文明の本拠地で、南米では最も早くスペイン人に征服され、それだけにスペイン語の影響を早くから受けてきた。この点で、複式流音が広く行き渡っているマヤ語圏と共通した面をもっているといえよう。

これに対して、南米で先住民言語を最も数多く残しているアマゾン地域とその周辺に分布する諸言語は、大部分が単式流音型に属している。系統的には、アラワック、カリブ、パノ、タカナ、マクロ・ジェー、トゥピなど、南米の主要な語族の大部分がこれに含まれる。これらの語族内部の比較研究とそれに基づく祖語の音韻再構の試みもある程度進められているが、それらを見ると、上に挙げた大部分の語族はその祖語の段階で、流音は一種類である<sup>26</sup>。

最後に、南米で流音を欠如する言語は手元のデータで9を数える<sup>27</sup>。これらの言語はその現れ方が系統的にも地域的にも非常に散発的であるために、北米や中米の場合のように、特定の語族や地域に結びつけることが目下のところ困難である。また管見の限り、その祖語の段階で流音を欠如していたと想定されるようなケースは、少なくとも主要な語族の中には見当たらない。

以上、アメリカ大陸における流音タイプの現れ方を概観した。この中で、中米のマヤ諸語と南米アンデス地域の諸言語に見られる複式型の流音がこれらの言語に本来的な特徴なのかそれとも長期にわたるスペイン語の影響によって生じたものか、これに正確な解答を与えることは現状では困

<sup>26</sup> タカナ祖語、パノ祖語、西カリブ祖語については、Key 1979: 86, 88, 101, アラワック祖語、ジェー祖語については Longacre 1977: 134, 136 を参照。

<sup>27</sup> この9言語とは次のものである。かつこ内は系統的所屬と地域を示す。

*Motilon* (Chibchan/Colombia), *Mura* (Mura-Pirahã/Brazil), *Wao-rani* (Isolate/Ecuador), *Siona* (Tucanoan/Colombia), *Secoya* (Tucanoan/Ecuador), *Aguaruna* (Jivaroan/Peru), *Kuikuro* (Carib/Brazil), *Cashinahua* (Panoan/Peru), *Ese Eja* (Tacanan/Bolivia)。

ちなみに、この中のムラ語は流音だけでなく鼻音まで欠如するという世界でも稀有な言語である (cf. Ruhlen 1976: 244)。

難である。従って、これらの言語を一応考慮外に置くと、アメリカ大陸はほぼ全域にわたって、流音に l と r を区別しない単式型の言語圏を形成するということができよう。この点でアメリカ大陸は、先に検討したユーラシアの太平洋沿岸部と同じ特徴でつながっている。ただし、ユーラシアの太平洋沿岸部には流音欠如型の言語がまったく現れないのに対して、アメリカ大陸にはこのタイプがかなり数多く見られる。特に、北米東部に広く分布するアルゴンキン語族、中米最大のオト・マング語族、ミヘ・ソケ語族などがおそらくその祖語の段階で流音を欠いていたという点は注目に値する。しかし、少なくとも北米の太平洋側の諸言語は、ユーラシアの太平洋沿岸諸言語と流音タイプに関して密接なつながりを見せている。

## 5 その他の地域

単式流音型の現れる最後に残された地域は、オセアニアのニューギニアとサハラ以南のアフリカである。まずニューギニアから見ていこう。

### 5.1 ニューギニアのパプア諸語

ニューギニアとその周辺の島々で話される非オーストロネシア系の諸言語は、パプア語と総称される。メラネシアを含むオセアニアの島々にオーストロネシア系の住民が拡散したのは今からおよそ3千5百年前以降と見られるが、パプア人がニューギニアに定住するようになったのは、少なくとも今から1万年以前の後期旧石器時代とされている。現在このパプア系言語を話す人口はおよそ4百万、言語数は750を上回るという。これらの言語の系統的分類は最近のオセアニア言語学の大きな課題であるが、通常の意味で語族というような単位にすると、少なくとも60以上の語族が立てられるといわれる (Foley 1986: 3)。もちろん、それをさらに上位の語群にまとめて、たとえば、ニューギニア島を東西に縦断する「高地ニューギニア大語族 Trans-New Guinea phylum」というようなものを樹立する試みもある<sup>28</sup>。

<sup>28</sup>Wurm 1982 によれば、パプア諸語の約70パーセントがこの大語族に含まれるとされ (p.76)、残りは10の語族にまとめられている。

パプア諸語に関する流音のデータはけっして十分とはいえないが、これを見ると、複式流音型 10 に対して単式が 43, 流音欠如型が 10 となっている。ここでも単式流音が圧倒的に高い比率を示しているが、これと並んで流音欠如型も全体の約 16% で、これはアメリカ大陸よりも高い比率である。

一般に、パプア諸語の音韻体系は比較的単純なものが多く、たとえば、ソロモン群島北部のキエタ島で話されるロトカス語は、母音が /aiueo/, 子音が /p t k b d g/ と合計 11 個の音素しかない (Maddieson 1984)。この子音体系は、前述のアマゾン地域のムラ語と同じく、鼻音も流音も欠けるという珍しいタイプであるが、この音素表の中の /d/ は実際には歯茎たたき音 (alveolar tap) で r 音に近い音として実現される。しかし、ロトカス語のような音体系はメラネシアでもむしろ異例なもので、一般にパプア諸語の平均的な子音組織は、たとえばニューギニア東部高地で話されるフォレ語の【表 6】のような体系だとされる (Foley 1986: 55)。

閉鎖音	p	t	k	?
摩擦音			s	
鼻音	m	n		
半母音	w	y		

表 6: フォレ語の子音体系

この体系で注目されるのは、やはり流音音素が欠けている点であるが、しかしこれはフォレ語に流音が全く現れないという意味ではない。それどころかこの言語には l や r に類した音は頻繁に現れる。しかしこれらの音は t 音と完全に相補分布をなして、概略、語頭では [t/d], 語中の母音間では [l/r] で現れるという形になっている。つまり [t/d] と [l/r] は同一音素 /t/ の異音という関係になっているのである (Foley 1986: 55)。同じような現象は、フォレ語と同じ東部高地語群に属するゲンデ語やカマノ語にも見られる (Wurm 1982: 88)。

従って、ニューギニアの言語の場合、表面的な音現象として r 音が観察されたとしても、そこから直ちに当該言語で流音が音素として確立されて

いると判断するわけにはいかない。実際、パプア諸語の中には l, r 音が t, d 音と交替して現れる場合がしばしば見られ、この点で流音の音素的地位はかなり不安定だといえる。また特に東部高地の諸言語の比較による音対応を見ると、ある言語の t, d 系の音に対して別の言語の l, r (あるいは z, y) が対応するという形になっていて、言語間で一律に流音が現れるという対応は見られない (Wurm 1982: 88ff.)。このような事実を勘案すると、たとえば「ニューギニア高地大語族」にはもともと流音は音素として存在しなかった可能性が高い。

ともあれパプアニューギニアは、人類言語がどのようなプロセスで流音という音素を獲得したかという問いに対して、ひとつの有力な見通しを与えるものといえよう。

## 5.2 サハラ以南のアフリカ

単式流音型の現れる最後の地域はアフリカである。この大陸はユーラシアに次いで数多くの言語を擁する地域であるが<sup>29</sup>、近年におけるアフリカ諸語の系統分類は以前に比べて非常に単純化され、全部で4つの語族に整理された。すなわち、北の方からアフロ・アジア、ナイル・サハラ、ニジェール・コンゴという3つの大語族が順次に並び、その最南端に第4の語族として、今や消滅の危機に瀕した言語を多く抱えるコイサン語族が分布する。

すでに見たように、アフリカでは流音タイプに関して2つの言語圏がはっきり分かれる。すなわち、アフロ・アジアとナイル・サハラの両語族を含む北部アフリカはほぼ百パーセント複式流音型に属し、単式および欠如型はサハラ以南に残された2つの語族にしか現れない。

### 5.2.1 ニジェール・コンゴ語族の流音

手元のデータを見ると、まずニジェール・コンゴ語族では、複式流音型の言語が40、単式型が41でほぼ伯仲し、欠如型はわずか2言語にとどまる。しかしこのような状況は、どうやらこの語族の本来の姿ではなかった

<sup>29</sup>Grimes 1996 によれば、ユーラシアの言語数は2390、アフリカのそれは2011となっている。

らしい。

たとえば、この語族中最大の言語群であるバントゥー諸語は、現在は大部分の言語が少なくとも1種類の流音をもっているが、ベンドル・サミュエルによれば、これまでに試みられたバントゥー祖語の子音の再構は【表7】のようにな形になるという (p. 413)。

強音	p	t	c	k
弱音	b	d	j	g
鼻音	m	n	(ñ)	ŋ

表7: バントゥー祖語の子音体系

この子音体系で注目されるのは、流音だけでなく摩擦音も音素として存在しないことである。f, sなどの摩擦音は「超狭母音」\*j, \*yの前のp, tから、同じく流音は語中の母音間でのdの摩擦化によって発生したとされる (Bendor-Samuel 1989: 462)。これはバントゥー語の摩擦化 (Bantu spirantization) と呼ばれているが、同じような現象は、すでに検討したギリヤーク語にも見られ、また印欧語ではケルト語の弱音化 (lenition) がよく知られている。

一方、西アフリカのグル諸語の子音組織はかなり複雑で、現在のすべての言語はその中に流音として側面音をもっている。しかしr音 (歯茎はじき音) は、通常はdの語中での変異音としてしか現れず、自立の音素にはなっていない。さらにこの側面音も、グル祖語の段階では音素としては存在しなかったようである (Bendor-Samuel 1989: 152)。

スーダン共和国のヌバ山地に孤立するコルドファン諸語の子音組織は、鼻音を除くと、【表8】のよう形で示さる (Bendor-Samuel 1989: 75)。この言語には子音の強弱に関して一種の段階的な交替があり、4段目の継続子音の系列は、語中での有声子音の弱まりとして現れる。この弱まり子音の中で、歯茎音 d とペアになって現れるのがそり舌はじき音の ɽ である。

ナイジェリア南東部に分布するクロス・リバー諸語の子音組織も、鼻音

	唇	齒	齒茎	硬口蓋	軟口蓋
重子音	pp	tt <sub>m</sub>	tt	cc	kk
無声子音	p	t <sub>m</sub>	t	c	k
有声子音	b	d <sub>m</sub>	d	j	g
継続子音	β	ð	ɾ	y	ʏ

表 8: コルドファン諸語の子音体系

と半母音を除くと【表 9】のようになる (Bendor-Samuel 1989: 386) .

重子音	pp	tt	kk	/
無声子音	p	t	k	k <sup>w</sup> kp
有声子音	b	d	/	g <sup>w</sup>

表 9: クロス・リバー諸語の子音

ここでもバントゥー祖語の場合同様、音素としての流音も摩擦音も存在せず、r音はdの弱音化によって生じているだけである。

このように見てくると、ニジェール・コンゴ語族の流音は、舌先の閉鎖音 (t, d など) の語中での閉鎖の弱まりにその源をもっていることが分かる。従って、この音はもともと語頭には現れなかったわけで、今でもこの傾向は、これらの言語にかなりはっきりと認められる。

ちなみに、日本語でもラ行子音はすでに述べたように本来語頭に立たなかった。これと同じ現象は朝鮮語、モンゴル諸語、ツングース諸語、ドラヴィダ諸語、バスク語<sup>30</sup>、印欧語の中のギリシア語、アルメニア語、ヒッタイト語などユーラシアの諸言語に広く見られるが、これはおそらくr音発生のメカニズムにその根元をもつ人類言語に普遍的な傾向といっていよう。かつてこの現象は、日本語をいわゆるウラル・アルタイ語に結びつける重要な特徴のひとつに数えられたが、正しい言語観察に基づいた見解とは言いがたい。

<sup>30</sup>現在のバスク語だけでなく、フランスからイベリア半島にかけて話されていた印欧語前の古い土着の言語 (たとえばアクィタニア語や古イベリア語) も同じ特徴を共有していたらしい。



### 5.2.2 コイサン語族の流音

次に、コイサン語族はアフリカで最も情報の不足した言語圏で、手元のデータも零細だが、これを見ると、複式流音型が1、単式が5、欠如型が2言語となっている。この中で複式流音をもつただひとつの言語は、東アフリカのタンザニアに孤立するサンダウェ語である。従って狭義のコイサン語圏は単式型かさもなければ欠如型ということになる。

この言語圏では中央部に位置するコイ系の言語（代表はナマ・ホッテントット語）とそれを挟んで南と北に分布する主にサン（またはブッシュマン）系とでは言語タイプがかなり異なり、これはおそらく、南および北のグループが新来のバントゥー諸語の影響にさらされた結果この語族に本来の特徴を失ったためであろう。従って、この語族では中央群の言語の証言が重要である。

データの中で流音を欠如する2つの言語は、いずれもこの中央群に属している（Kxoe および Gani-Khwe）。つまり、これらの言語で閉鎖音の /b/ と /d/ は語中ではそれぞれ [β] および [r] で実現されるという関係になっているからである（Köhler 1981: 486, 1989: 74）。ナマ・ホッテントット語の r もほぼ同じような条件で現れるようだが、ただここでは t と r が完全に相補分布ではなく、tatap「父」という“ただ一つの語”で母音間に t が現れるという（Hagman 1977: 13）。こうして見ると、どうやらコイサン語族も本来は流音欠如型の言語だったようである。

周知のように、この語族には吸着音（click）という特異な音種が見られ、子音組織の複雑さにかけて世界言語の筆頭に数えられているけれども、こと流音に関しては世界一貧弱な言語圏だといってよいかもしれない。

### 5.2.3 ピジン・クレオール

最後に、手元のデータの中に含まれたピジン・クレオールと呼ばれる諸言語について簡単に触れておこう。たまたま調査の射程内に入ったわずかなデータは、表1に示したように、複式流音型が2、単式流音型が5となっている。このうち複式の2言語は、フランス語をベースとするハイチ・クレオール語（カリブ海ハイチ共和国）とポルトガル語ベースのパピ

アメント語 (アメリカ領プエルト・リコ) である。一方単式型5言語の中の2つは、中部アフリカのコンゴ川流域で話されるバントゥー語をベースとしたリンガラ語とキトゥバ語で、いずれもバントゥー諸語の1形態と見なされる。残りの2つは、南米スリナム共和国で話される英語をベースとしたジュカ語とサラマッカ語で、どちらも西アフリカの黒人の言語が基層となっている。最後のひとつは、合衆国西部で行われていたデラウェア・ジャーゴンで、これは土着のアルゴンキン語その他をベースとするピジン語の一種である。

これらの言語の流音タイプは、いずれもその形成にあずかったもとの言語の特徴を受け継いだものと見られ、従って、特にピジン・クレオールに特有のタイプというものは、少なくとも手元のデータからは見えてこない。

## 6 複式流音型の言語圏

以上、世界言語の中で単式流音および流音欠如型の現れる言語圏を概観した。最後に残された複式流音型の分布圏は、すでに述べたように、太平洋沿岸部を除くユーラシア内陸部から北部アフリカを包含する「アフロ・ユーラシア」ともいうべき広大な地域であり、これにもうひとつオセアニアの中のオーストラリア大陸が加わる。

### 6.1 アフロ・ユーラシアの複式流音

#### 6.1.1 中心分布としての複式流音圏

北部アフリカからユーラシア大陸の大部分を含むこの複式流音型の言語圏は、その領域の広さと含まれる言語数の大きさにもかかわらず、この特徴に関するかぎり、全く等質的であり、少なくとも現在話されている言語の中で例外は皆無といってよいだろう。

ここには系統的に、アフリカでは前述のナイル・サハラとアフロ・アジア、ユーラシアではインド・ヨーロッパ、ウラル、ドラヴィダという5つの大語族が含まれ、さらにチュルク、モンゴル、ツングースを含むアルタイ系諸言語、東、西、南の3語群を擁するコーカサス諸語がこれに加わる。

これらの主要な語族については、語族内部の比較研究に基づく祖語の再構も十分に進められているが、その中で、ユーラシアではセム祖語、印欧祖語、ウラル祖語、ドラヴィダ祖語に関しては、それぞれの祖語の段階で複式の流音が存在したことが確かめられている。これらの祖語の所属年代は、大体今から5千年から7千年ほど前と見られ、従って、これらの語族では少なくとも過去数千年間、流音のタイプは変わらなかったことになる。

以上の他に、この地域には系統的に孤立した言語として、現代語では、ヨーロッパのバスク語、パキスタン西北端のカラコルム山系の懷に抱かれたブルシャスキー語、シベリアはイェニセイ川中流域のケット語、同じくシベリア北東部コリマ川流域に生き残るユカギール語があり、また古い文字記録によって知られる言語では、楔形文字によるシュメール語、フルリ語、ウラルトゥ語、ハッティ語、エラム語があり、またアルファベット系文字では、古代イタリアのエトルリア語、フランス南西部のケルト前のアクィタニア語、印欧語前のイベリア半島で話されていた古イベリア語などが挙げられる。しかしこれらの言語も、流音のタイプに関しては、すべて例外なく複式流音型に属している。

このように、この地域の少なくともユーラシアは、現代語のレベルで眺めても、またそれぞれの祖語の段階や古い言語記録を遡って見ても、流音のタイプは驚くほど一様で、まさに複式流音一色に塗りつぶされている。言語地理学の用語を借りれば、それはあたかも、ある中心部で発生した「言語改新の波」がそこから周辺に向かって連続的にその波紋を広げた結果を想起させる。しかし、この言語改新の大きな波によって完全に覆い尽くされたかに見えるこの地域にも、仔細に観察すると、古い流音タイプの残存が必ずしも絶無とはいえないのである。

### 6.1.2 アフロ・ユーラシアにおける単式流音型の痕跡

手元のデータの中で、アフロ・アジア語族中ただ一つ単式流音型と見られる言語があって、それが古代エジプト語である。すなわち、この言語を表記した古い聖刻文字には l と r の区別が見られない。これは、エジプト祖語には存在したと見られる r 音がある時期に n に変化するという形で聖

刻文字エジプト語から姿を消したためらしい。ただし中期エジプト語の段階になると再び r 音が回復された (Loprieno 1995: 31)。

古代エジプト語とやや類似した現象が、印欧語の中のインド・イラン語派にも起こった。これは印欧語音韻史上の大きな謎のひとつであるが、インド・イラン語はその共通時代のある時期に l と r の区別を失い、その結果他の語派の l に対しても r だけで対応している<sup>31</sup>。しかし記録時代に入るとどちらのグループも l を再び獲得して、複式流音型に戻っている。インド・イラン語派でなぜこのような音変化が起こったかは、今もって明確な説明は与えられていない。

最後にとりわけ注目されるのは、紀元前2千年紀のエーゲ海域で用いられたミノア文字の与える証言である。すなわち、この文字体系のひとつである線文字Bは、今世紀の半ばすぎに解読され、古いギリシア語を表記するために用いられていたことが判明した。これは日本語の仮名文字によく似た音節文字である。ところがここにはやはり日本語の仮名と同じように、ラ行子音に当たる文字が一系列しかなく、ギリシア語の l と r を書き分けることが全くできない。もともとミノア文字は、ギリシア語前のエーゲ世界でクレタ島を中心に栄えたミノア文化の産物であり、ギリシア語を表記するために作られたものではない。とすれば、この文化を築きそこから独自の文字を生み出したミノア人の言語は、ギリシア語と違って l と r を区別しない単式流音型の言語であったという推定が当然出てくるわけである。

こうして見ると、流音タイプに関して完全に等質的に見える「アフロ・ユーラシア」にも、かつては単式流音型の言語がアフリカ北部、エーゲ海域あるいはアジア内陸部などに散在し、それらが古代エジプト語やインド・イラン語に目に見えない影響を及ぼし、さらにはミノア文字という特異な文字体系の中にその痕跡を残したと考えられる。しかしこのような古い言語とその特徴は、今からおよそ4, 5千年前以降、これらの地域に急速に広がった少数の大語族によって完全に覆い隠されてしまったのである。

<sup>31</sup>たとえば、*Gr. leuk-*, *Lat. lūc-*, *Eng. light* に対して *Skr. roc-*, *Avesta raoč-* 「光、明るい」、*Gr. leip-*, *Lat. liq-*, *Eng. leave* に対して *Skt. rik-*, *Av. raex-* 「残す」など。

## 6.2 オーストラリア原住民語の流音タイプ

オセアニアの世界で独自の言語圏を形作るオーストラリアは、今から1万2千年ほど前までは、ニューギニアと陸続きの「サフル」と呼ばれる大陸を形成していた。ここに人類が最初に移住したのは4～5万年前といわれる<sup>32</sup>。

18世紀に白人が到来する以前、オーストラリアにはおよそ30万の原住民が600近い部族に分かれ、250前後の言語が話されていたという。これを系統的に分類すると約28の語族に分かれ、このうちの27はごく小規模の語族で、そのほとんどがオーストラリア北西端のキンバリーからアーネムランドにいたる狭い地域に密集している。一方最後の「パマ・ニュンガン」と呼ばれる語族は、これだけで原住民語の約3分の2を包含し、残りの大陸のほぼ全域に分布する。しかし現在、これらの原住民語のおよそ150はすでに消滅し、残存する言語もその大部分が消滅の危機にさらされている (Wurm 1996: 22)。

かつては陸続きであったとされるニューギニアとオーストラリアは、言語的に見るとかなり違っている。その違いの著しい例が流音のタイプで、オーストラリアは完全に複式流音型の言語圏である。しかも、オーストラリア諸語は、単にlとrを区別するだけでなく、しばしばそのr音に何種類もの区別が見られる。Dixon (1980: 144) によれば、オーストラリアのほとんどすべての言語は、r音に少なくとも2種類 (舌先ふるえ音とそり舌の接近音) が区別されているという。

オーストラリア原住民語に共通する子音のもうひとつの大きな特徴は、舌先や前舌の部分が関与する閉鎖音の種類が多いことで、たとえば西部クイーンズランドのピタピタ語、カルカトゥグ語などパマ・ニュンガン系の多くの言語は、日本語のほぼタ行子音 (t, d) に当たるところに、歯茎音、後部歯茎音、舌端音、後部舌端音という4種類の音をもっている (Dixon 1980: 139)。それに対応して鼻音や流音の種類も多くなるわけだが、その反面、子音に有聲・無声の区別がなく、また一般にsやfなどの

<sup>32</sup>McConvell & Evans 1997:1ff., 18f.

摩擦音が全く欠如している。

オーストラリア原住民語のこのような子音の体系は、ユーラシアの言語の中では南インドのドラヴィダ語にその最も近い類例を見いだすことができる。このドラヴィダ諸語も、舌音系の閉鎖音に多くの区別があり、それに応じて流音の種類も多いことで知られている。最近その再構が試みられているドラヴィダ祖語の子音組織を見ると、舌音系の閉鎖音として歯音、歯茎音、そり舌音の3系列、また流音も3ないし4種類が立てられている(Zvelebil 1990: 7, Steever 1998: 14)。そしてこの子音体系は、同じように有声・無声の区別と摩擦音を欠いている。オーストラリア原住民語とドラヴィダ語の子音体系に見られるこの著しい類似が人類言語史上にどのような意味を持つかという問題は、今後に残された興味深い検討課題のひとつといえよう。

## 7 むすび

以上、日本語のラ行子音を出発点として、世界言語における流音のタイプの現れ方をやや詳しく検討した。これによって、人類言語のこの音韻的特徴が地理的にも語族的にきわめて興味深い分布を示していることが明らかとなった。

その分布をまずユーラシアについて見ると、ここでは複式流音型に属するユーラシア内陸部と単式流音型に属する太平洋沿岸部とがかなりはっきりと分かれる。この二つの言語圏は、概略、北はチュクチ・カムチャツカ半島から南はインドのアッサム地方を結ぶ線を境として、この線の太平洋側には、チュクチ・カムチャツカ諸語、ギリヤーク語、アイヌ語、日本語、朝鮮語、中国語、チベット・ビルマ語族の東方群、ミャオ・ヤオ諸語、タイ・カダイ諸語、ムンダ語を除くオーストロアジア諸語、オーストロネシア諸語が分布し、一方その内陸側には、ツングース、モンゴル、チュルクを含むアルタイ系諸言語、チベット・ビルマ語族の西方群、アジアの印欧諸語、ドラヴィダ諸語、さらにその西方に、ウラル諸語、コーカサス諸語、セム諸語、ヨーロッパの印欧諸語、その他いくつかの系統的孤立語が分布

する。

ユーラシアに現れたこの二つの流音分布圏は、ユーラシアを越えてさらに他の地域へと延びている。すなわち、ユーラシア内陸部の複式流音圏は、アフロ・アジア語族を介してアフリカにつながり、サハラを含むアフリカ北部を同じ圏内に包み込み、ここに「アフロ・ユーラシア」とも呼ぶべき広大な言語圏を形作る。一方、太平洋沿岸部の単式流音圏は、その北方でエスキモー・アリュート諸語を介してアメリカ大陸とつながり、ここに太平洋を取り囲んで「環太平洋」ともいうべき言語圏が形作られる。

流音タイプの複式か単式かによって分けられたこの2つの大言語圏の周辺に、今度は、流音音素を全く欠如するかあるいは比較的新しくそれを獲得したと思われる少数の言語圏が限られた地域に散在する。すなわち、北米東部のアルゴンキン諸語、中米のオト・マンガ、ミヘ・ソケ諸語、ニューギニア高地のパプア諸語、そしてアフリカ南部のコイサン諸語などである。

今これら3つの流音タイプの地理的分布を地球全体の規模で見渡してみると、そこに人類言語史の興味深いひとつの局面が浮かび上がってくる。すなわち、アフリカ北部からユーラシアの内陸部は、「新人」と呼ばれる現代型人類の登場以来、人類史の常に中心舞台となってきた場所であり、その意味で複式流音型の分布圏は、言語地理学でいわゆる典型的な“中心分布”の様相を呈している。一般に言語変化は、その中心部において最も広範かつ連続的に伝播し、それによって均質化された新しい言語層が形作られていく。それに対して単式流音型の言語圏は、この中心分布の周辺にいわば“周圈的”な分布を作って広がっているかに見える。つまり、中央で起こった言語改新の波が及ばなかったために、中央では失われた古い言語相がこれらの地域に残存したと解釈できるからである。しかし、この単式流音型の言語圏は、さらにその周辺部に、流音欠如型というもうひとつの周圈的な分布圏をもっている。現在はごく限られた地域の少数の言語にしか見られないこの特徴は、流音タイプに関する限り、人類言語のおそらく最も古い様相を保持したものと見ることができよう。また流音をめぐってこれらの言語に観察される音声的現象は、人類言語がどのようなプロセ

スによって流音という音素を獲得したかという興味深い問題に対してきわめて有益な示唆を与えてくれる。

ところで、単式流音型の現れるユーラシアの太平洋沿岸部は、現在は南北に延びる狭い帯状の地域であるが、このような地形が作られたのは、今からおよそ1万年前以降のことであり、それに先立つ後期旧石器時代、つまり最終氷期の末までは、今より百メートル近い海面の低下のために、沿岸部の地形は現在とは全く違った様相を帯びていた。すなわち、その北方は、広大なベーリンジア陸橋によってアメリカ大陸と完全につながり、日本列島は大陸の一部にすぎず、朝鮮半島から東シナ海の一帯は広大な陸地と化して日本列島の目前に迫っていた。またその南方には、ジャワ、スマトラ、ボルネオなど東南アジアの島嶼部は大部分が地続きとなってインドシナ半島と一体化し、スンダ陸棚というユーラシアから張り出したひとつの亜大陸を形成していた。つまり、1万年前までの太平洋沿岸部は、今とは比較にならないほど広大な陸地をもち、狩猟と採集を生業とする後期旧石器時代の人類に限りなく広く豊かな活動舞台を提供していたわけである。地域間の人々の往来も後の時代よりはるかに自由でまた容易に行われたに違いない。

流音タイプに関して太平洋沿岸部がひとつの連続した言語圏を形作り、しかもそれが太平洋を越えてアメリカ大陸の諸言語と密接なつながりを見せるという事実は、このような後期旧石器時代の地理的環境を考慮に入れることによって、はじめて納得のいく説明が与えられるだろう。つまり、ここで明らかにされた流音タイプの地理的分布について、その通時的な背景を探ろうとすれば、少なくとも1万年前の後期旧石器時代まで遡って人類言語史の再構を試みるというようなきわめて巨視的な観点が必要であり、そのためには従来の歴史言語学の枠組みを越えた何か別の方法論をうち立てなければならない。小論はそのひとつの模索的な試みに他ならないのである。

最後に付言すると、流音タイプの分布によって浮かび上がった「太平洋沿岸言語圏」は、単にこうした音韻特徴によって性格づけられるだけでは



ない。それとは別に、実はいくつかの重要な類型的特徴がこれに関わっている。

その最も顕著なものは、品詞としての形容詞の位置づけに関するもので、世界言語の形容詞のタイプは、大きく分けると「形容詞体言型」と「形容詞用言型」の2つのタイプに分けられる。たとえば、日本語、アイヌ語、朝鮮語などは典型的に形容詞用言型の言語であり、アルタイ語や印欧語は明瞭に形容詞体言型の言語である。この二つのタイプの地理的分布を見てみると、少なくともユーラシアとアメリカ大陸に関しては、その分布が流音タイプの分布とほぼ完全に一致する。すなわち、形容詞体言型の分布圏はユーラシアの内陸部からアフリカ北部に広がり、一方形容詞用言型の分布は、太平洋沿岸部とアメリカ大陸の大部分を覆っている(松本 1998a)。

他に、似たような分布を示すものとして、名詞の性、数といった文法的カテゴリーや類別詞(ないし助数詞)の使用などいくつかの興味深い現象が挙げられるが、これについての詳しい議論は別の機会に譲らなければならない<sup>33</sup>。

### 参考文献

- 『大辞典』 I-V = 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編) 1988-1993『言語学大辞典』 I-V, 東京:三省堂
- Austerlitz, Robert P. 1990 「類型から見たギリヤーク語」 崎山理(編)『日本語の形成』(三省堂): 169-184.
- Austerlitz, Robert P. 1986, 'Areal phonetic typology in time: North and East Asia', Lehmann, W. (ed.) *Language typology 1985* (Amsterdam: Benjamins): 27-42.
- Bendor-Samuel, John (ed.) 1989 *The Niger-Congo languages*, Lanham: University Press of America.

<sup>33</sup> これらの分布の概略については、松本 1994, 同 1996, また北部ユーラシアにおいてはほぼ同様な分布を示す母音調和の二つのタイプに関しては、松本 1998b を参照されたい。

- Benedict, Paul K. 1972 *Sino-Tibetan: a conspectus*. Cambridge University Press.
- Benedict, Paul K. 1975 *Austro-Tai: language and culture, with a glossary of roots*, New Haven: HRAF Press.
- Blevins, Juliette 1993 'Gilyak leiniton as a phonological rule', *Australian Journal of Linguistics* 13: 1-21.
- Bodman, Nicholas C. 1980 'Proto-Chinese and Sino-Tibetan: data towards establishing the nature of the relationship', Coetsem & Waugh (eds.) *Cornell linguistic contributions* vol.3 (Leiden: Brill): 34-199.
- Bogoras, Waldemar 1922 'Chukchee', Boas (ed.) *Handbook of American Indian languages, Pt. 2.*, Bureau of American Ethnology, Bulletin 40: 631-903.
- Burling, Robbins 1961 *Garó grammar*, Poona: Deccan College, Post-graduate and Research Institute.
- Campbell, Lyle 1979 'Middle American languages', Campbell & Mithun (eds.): 902-1000
- Campbell, Lyle & Mithun, Marianne (eds.) 1979, *The languages of Native America: historical and comparative assessment*, University of Texas Press.
- Comrie, Bernard (ed.) 1987 *The World's major languages*, London: Croom Helm.
- Constantino, Ernest 1971 'Tagalog and other major languages of the Philippines', Sebeok (ed.): 112-154.
- Dahl, Otto Ch. 1976 *Proto-Austronesian*, Lund: Studentlitteratur.
- Delancey, Scott 1987 'Sino-Tibetan languages', Comrie (ed.): 797-854.
- Dixon, R. M. W. 1980 *The languages of Australia*, Cambridge University Press.

- Dyen, Isidore 1953 'Dempwolff's \*R', *Language* 29: 359-366.
- Dyen, Isidore 1971 'The Austronesian languages and Proto-Austronesian', Sebeok (ed.): 5-54.
- Edmonds, Jerold A. & Yang Quan 1988 'Word-initial preconsonants and the history of Kam-Sui resonant initials and tones', Edmondson & Solnit (eds.): 143-166.
- Edmonds, Jerold A. & Solnit, David B. (eds.) 1988 *Comparative Kadai: linguistic studies beyond Tai*, Dallas: The Summer Institute of Linguistics.
- Foley, William A. 1986 *The Papuan languages of New Guinea*, Cambridge University Press.
- Fortescue, Michael 1984 *West Greenlandic* (Croom Helm Descriptive Grammars), London: Croom Helm.
- Goddard, Ives 1996 *Handbook of North American Indians, vol. 17: Languages*, Washington: Smithsonian Institution.
- Golonko, E.V. & Vaxtin, N.B. 1990, 'Aleut in contact: the CIA enigma', *Acta Linguistica Hafniensia* 22: 97-125
- Greenberg, Joseph H. 1987 *Language in the Americas*, Stanford University Press.
- Grimes, Barbara F. 1996 *Ethnologue: Languages of the world*, 13th ed., Dallas: Summer Institute of Linguistics.
- Gruzdeva, Ekaterina, 1998 *Nivkh* (Languages of the world/materials 111), München: Lincom Europa.
- Hagman, Roy S. 1977 *Nama Hottentot grammar*, Indiana University.
- 泉井久之助 1955 「比較言語学における共通音韻定立の限界—マライ・ポリネシア語における\*γについて」『言語研究』28: 10-18.
- Jones, Robert B. Jr. 1961 *Karen linguistic studies: description, comparison, and texts*, University of California Press.

- Kaufman, Terrence 1977 'Areal linguistics and Middle America', Campbell & Mithun (eds.): 63-87.
- Kaufman, Terrence 1994 'The native languages of South America', Morsely & Asher (eds.): 46-76.
- Key, Mary R. 1979 *The grouping of South American Indian languages*, Tübingen: Gunter Narr.
- Köhler, Oswin 1981 'Les langues khoisan', Perrot (ed.): 455-615.
- Köhler, Oswin 1989 *Die Welt der Kxóé-Buschleute im südlichen Afrika I: Die Kxóé-Buschleute und ihre ethnische Umgebung*, Berlin: Dietrich Reimer.
- Ladefoged, Peter & Maddieson, Jan 1996 *The sounds of the world's languages*, Oxford: Blackwell.
- Li, Fang Kuei 1977 *A handbook of comparative Tai*, The University Press of Hawaii.
- Longacre, Robert E. 1977 'Comparative reconstruction of indigenous languages', Sebeok (ed.): 99-139.
- Loprieno, Antonio 1995 *Ancient Egyptian: a linguistic introduction*, Cambridge University Press.
- Maddieson, Ian 1984 *Patterns of Sounds*, Cambridge University Press.
- Matisoff, James A. 1988 'Proto-Hlai initials and tones: a first approximation', Edmondson & Solnit (eds.): 289-322.
- 松本克己 1994 「日本語系統論の見直し—マクロの歴史言語学からの提言」『日本語論』2-11: 36-51.
- 松本克己 1996 「日本語の系統」諏訪春雄・川上湊編『日本人の出現—胎動期の民族と文化』(雄山閣): 136-166.
- 松本克己 1998a 「形容詞の品詞的タイプとその地理的分布」『言語』27-3: 18-25.

- 松本克己 1998b 「ユーラシアにおける母音調和の二つのタイプ」『言語研究』114 (刊行予定)
- McConvell, Patrick & Evans, Nicholas (eds.) 1997 *Archaeology and linguistics: Aboriginal Australia in global perspective*, Oxford University Press.
- Milner, G. B. 1963 'Liquid consonants and the relationship of Polynesian to Austronesian languages', *BSOAS* 26: 620-631.
- Miyaoka, Osahito 1996 'Sketch of Central Alaskan Yupik, an Eskimoan language', Goddard (ed.): 325-363.
- Morsely, Christopher & Asher, R. E. (eds.) 1994 *Atlas of the world's languages*, London: Routledge.
- Perrot, Jean (ed.) 1981 *Les langues dans le monde ancien et moderne, Première partie: Les langues de l'Afrique subsaharienne*, Paris: Editions du CNRS.
- Ruhlen, Merritt 1976a *A guide to the languages of the world*, Stanford University.
- Ruhlen, Merritt 1976b 'The geographical and genetic distribution of linguistic features', Juillard (ed.) *Linguistic studies offered to Joseph Greenberg*, vol.1: 137-160.
- Schachter, Paul & Otanes, Fe T. 1972 *Tagalog reference grammar*, University of California Press.
- Sebeok, Thomas A. (ed.) 1971 *Current trends in linguistics, vol. 8: Linguistics in Oceania*, The Hague: Mouton.
- Sebeok, Thomas A. (ed.) 1977 *Native languages of the Americas*, vol.2, New York: Plenum Press.
- Sekierina, Irina A. 1994 'Copper Island (Mednyj) Aleut (CIA): A mixed language', *Languages of the World* 8: 14-31.

- Shafer, Robert 1974 *Introduction to Sino-Tibetan*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Skorik, P. Ja. 1979 'Chukototsko-Kamchatskie Jazyki', *Jazyki Azii i Afriki III*: 230-263.
- Steele, Susan 1979 'Uto-Aztecan: an assessment for historical and comparative linguistics', Campbell & Mithun (eds.): 444-544.
- Steever, Sanford B. 1998 *The Dravidian languages*, London: Routledge.
- Suárez, Jorge A. 1983 *The Mesoamerican languages*, Cambridge University Press.
- Thurgood, Graham 1988 'Notes on the reconstruction of Proto-Kam-Sui', Edmondson & Solnit (eds.): 179-218.
- Volodin, A. P. & Zhukova, A. N. 1968 'Itel'menskij Jazyk', *Jazyki Narodov CCCP* 5: 334-351.
- Wurm, Stephen A. 1982 *Papuan languages of Oceania*, Tübingen: Gunter Narr.
- Wurm, Stephen A. (ed.) 1996 *Atlas of the world's languages in danger of disappearing*, Paris: UNESCO Publishing.
- Yasugi, Yoshiho 1995 *Native Middle American languages: an areal-typological perspective*, Osaka: National Museum of Ethnology.
- Zvelebil, Kamil V. 1990 *Dravidian linguistics: an introduction*, Pondicherry: Institute of Linguistics and Culture.

# The liquid types and their areal distribution

—Japanese *Ra-gyoon* in the history of human language—

Katsumi MATSUMOTO

In this paper, the three types of language are set up with regard to the liquid phonemes: (1) *the multiliquid type* which distinguishes the lateral and the rhotic kind of liquid as at least two separate phonemes, (2) *the uniliquid type* which has only one kind of liquid, lateral or rhotic, and (3) *the no-liquid type* which has no distinctive liquid phoneme.

Each of the three types is characterized by its own areal and genetic distribution among the world's languages. First, the multiliquid type comprises almost all the languages of Eurasia except the Pacific coast, of the North Africa, and of the aboriginal Australia. Second, the languages of the uniliquid type are found exclusively in the Pacific coastal area of Eurasia, in the North and South Americas, and in the sub-Saharan Africa. Third, the no-liquid type is restricted to a few areas and language families, particularly, Algonquian in North America, Oto-Manguan and Mixe-Zoque in Middle America, Papuan languages in New Guinea, and Khoisan in South Africa.

In terms of the linguistic geography, the multiliquid type may be considered to form the focal area of the world language, surrounded by the uniliquid type in its adjacency and by the no-liquid type in the further periphery.

The Japanese language shares its typical uniliquid feature with neighboring languages such as Ainu, Korean and Gilyak as well as with Chukchi-Kamchatkan and Eskimo-Aleut in the north and with Sinitic, Lolo-Burmic, Baric, Myao-Yao, Tai-Kadai, Viet-Muon, and Austronesian in the south. Thus the uniliquid type may be regarded as one of the major areal features of the Pacific coast, which is closely linked with

the Americas, especially with the northern and western areas. Based on a number of such features, the writer proposes to call these areas across the Pacific as *the circum-Pacific linguistic area*, which may ultimately go back to the late Paleolithic age when the two continents were connected through Beringia.

**matsmoto@jade.dti.ne.jp**